

若者「しごと」文化 ～新しい働き方をもとめて



扶籬文恵（センター事業団
奈良東事業所）

1、実践報告

①「若者の仕事としてのNPO」田村光子さん

平成13年に、知的障害者の方々の外出支援を始めました。知的障害をもっている方々の**おで**かけを、ナビゲート・アシストする活動をしています。知的障害をもった方の家族、特にお母さんは仕事を持たず、両親らがお互いに子どもを預かりあっているという現状もあります。そこで、おでナビは施設重視の収容型ではなく、たんに預かるだけでなく、生活を重視し、家族の方の豊かな地域生活の実現、地域支援・地域活動の向上を目指しています。

利用者・参加者が主役になれる活動を目指していて、それぞれが主役になれる場を提供し、人と人とのつながりを広げていく活動をしています。ハンディを持つ人がどうしたら「あたりまえの生活」ができるのか、から始まりました。その中で、人との出会いが活動の場をつくることを実感しました。

知的障害を持つ子どもの親も、子どもと一緒に行動することで、知らず知らずのう

ちに親の世界も狭くなり、障害をもつ子がたくさんいるところにいけば、そこがあたり前の世界だといつものまにか安心して保守的になってしまう傾向があります。親も社会に出ていく機会をもち、気軽に時代や流行にそった今の「あたりまえ」の形で暮らしていく方法は、地域に暮らす人たちみんな考えていったらよいのではないか・・・という思いから「地域とハンディをつなぐ会じょいんと」が結成されました。「障害を持つゆえに、「あたりまえ」の生活が阻まれ、ぶつかる障壁はなかなか取り除けない・・・それならば取り除くのではなく、今ある地域のなかにその思いをつなげていく活動をしていきたいと思っています。

みんなが意見をもって、こだわりをもって仕事をしていけたらいいと思います。私の課題は、就職ではなくNPOで働いていくために、人材を確保し、仕事として続けていけるような事業をどのように展開していくかということです。“職としてのしごと”をどう考えたらいいのか、みなさんと一緒に考えたいと思います。

■コーディネーター

田村光子(じょいんと)
 高成田健(労協センター事業団)

■報告者

田村光子(じょいんと)
 木村田哲也(ニュースタート事務局)
 高成田健(労協センター事業団)

■コメントーター

宮本みち子(千葉大学)

② 「スローワークのすすめ」木村田哲也さん

ニュースタート事務局とは、学校や企業に縛られない若者を支援し、社会に新たなライフスタイルのモデルを提示する「問題解決機関」です。既存の働き方に適応できない(しない)、自分の未来が見えない「引きこもり」という状態のあり方を肯定すると同時に、ニュースタートが推奨する”スローワーク”について紹介したいと思います。

引きこもりや幼児虐待の現状は、戦後、家族が自閉してしまっただけで大きな原因です。ニュースタートは家族を開くことを根幹コンセプトに、若者が自主運営する生活の場「若衆宿」を設けています。ここには、



多様な地域育ちの若者が一緒に暮らしています。完全な自主運営で全くルールのないアナーキー状態です。その他、仕事体験塾として「IT事業部」「地域サービス事業部」を設け、若者が自ら事業を構築していけるようなサポートをしています。さらに、海外への進出第一号店としてフィリピンのマニラに「若衆宿」をつくりました。若者の手で、日本語学校を設立する準備が進んでいます。経済的にも精神的にも立ち直る足がかりを作っていく取組みをしています。

最後に、ニュースタートが推奨する”スローワーク”について紹介します。

今の社会を見渡すと株式会社に限らず、教育・福祉・農業の場ですら効率・管理が徹底され、これにお金が生かされ、非人間的でスピーディーな部分的作業が押し付けられる「ファーストワーク」といえると思います。世の中が要求するこのような働き方に身体を合わせてしまっているのです。これに対して、非効率・非管理の原則をベースに、ゆっくりと自らの夢を探し、部分の作業に追われずトータルがわかるような仕事のあり方を「スローワーク」と呼び、そのような

学びの場・働き方の場を提供しています。

③「長い大学生活から」外河充朗さん

大学・大学院とあわせて9年になり、来年から会社員として働くことが決まっています。まだ、労働者でもない私がこの場でパネリストであることに、違和感や申し訳なさといったものを感じています。今日ここでは、私が長年の大学生活での様々な経験をお話ししたいと思います。

私が通っていた高校はかなりリベラルな学校で、自由な教育体験をしました。大学に入学して半年ぐらいは孤独でしたが、大学祭をきっかけに友人や教授との関わり方が変わってきました。大学9年間の間でも、できることをやっておこうと、意識的に人間関係の中に入っていくと、様々なイベントや集まりにひっぱられるようになり、県や国の教育担当課などが主催するキャンプなどで、運営スタッフとして任を与えられるようになった。

今、就職難で100社近く受けても内定をもらえない人たちもいると聞きますが、私は2社エントリーシートを出して、内定をもらいました。大学生活の中に転がっている+αを有効活用した結果だと思っています。

④「新しい働き方を求めて」高成田健さん

私は、雇われて働くのではなく、みんなで出資し、働き、経営するという対等な関係の協同組合で仕事をしています

私たちが取り組みを進めている地域福祉事業所では、営利だけが目的ではなく、地域で暮らす人たちのあったらイイナを事業化

しています。介護保険対応事業から始まり、草刈や送迎など地域からの「必要」の声を仕事にしていく、深く広いのサービスです。

なぜ、私がこのような世界に入ったかという、病弱な幼少時代の経験があります。病弱ゆえにいじめられていたが、父の都合で移り住んだアメリカで、言葉が通じなくても受け入れられただけ意見や経験、学生時代の様々なボランティア経験を通じて視野が広がりました。

一流大学を出て、一流企業に就職し出世するという理想のモデルが崩れ、会社の歯車にならない「働き方」、自らが手を出し実感できる「仕事」が協同組合ではないかと思っています。

II、実践報告を受けて：コメンテーター 宮本みち子先生

宮本：「普通」じゃない働き方の報告が4人の先輩方からあったかと思うのですが、「普通」じゃないのには、その理由があるのでは



と聞いてて思いました。

田村さんは、NPOと院生と2足のわらじをはきながらの生活ですが、NPOを立ち上げるその勇気はどこからきたのか、不安は無かったのですか？

田村:私も外河さんと一緒に、高校時代のユニークな教育経験も一つの要因だと思います。一年間のテーマを決めて、指導教師を自分で選び一年を通じて研究活動をするという経験が役にたっています。あとは、「何も知らなかった」という強みですかね。仕事を立ち上げ最初は不安もあったけど、今は人とつながっていくことの安心感を実感しています。人とのつながりが生み出す様々なネットワークは、自分の空間や居場所を創っていくという安心を得ています。

宮本:外河さんには、長期にわたる大学生活の資金はどうやって捻出したのか・・・について、とても興味深い経験なのでお話ししていただけますか？

外河:学生時代、ちょうどパソコンが一般家庭に普及し始めたころに、友人たちとインターネット接続仲介業を始めました。それを数年続けたらお金がたまりました。長期にわたる大学生活の資金になっています。今では、そんな仕事の需要はほとんどありませんが、ニーズの変化に応じて、事業を辞めたのがよかったのかなと思っています。

宮本:外河さんの話しかからは、学生と社会人の境界線がどんどんなくなってきているのを感じます。生きる知恵を見つけて、従来の枠組みを飛び越えていく、そんな姿があるのではないのでしょうか？

III、グループ討論

★「あなたの働くとは？」（自分は何なの

か？どこにいるのか？)

(ワークシートより抜粋)

「働くって、NPOなどで活動するということもあるんだな」、「生きがいある働きかたをしたいが、果たしてそれが仕事になるのか」(教員志望の学生)

「職業を考えるとき、一面的で固定的な見方をしてしまいがちだが、自分がその仕事をなんでやりたいのか深く考えることが大切ではないだろうか」(産業カウンセラー)

「フリーターを猶予期間という悪しき烙印をおすのではなく、インターシップのような準備期間として位置づけられないか」(NPOスタッフ)

「仕事がなくなり、社会の中で取り残されている気がして、なんのために生れてきたのかと思った。しかし、死ぬ勇気もない。そうすると、なんとか生きてみるしかないんじゃないかと、いろいろ模索した」(公務員退職後、インターンシップ)

各グループの報告の後、報告者と参加者が一体となって意見交換。教育学部の学生のほか、社会人からも活発な意見が飛び交う中で、現職の教員からは、教育現場での悩みやこれから挑戦してみたいこと、いましている実践などが語られる場面も。また児童演劇をやってきた50年の半生を振り返って「しごと」を語る発言もあり、参加者の共感を呼びました。

IV、まとめ：宮本みち子

私が若者の問題に関心を持ちはじめたのは10年ぐらい前です。最近では、若い人たちと深く語る機会ができ、県との共催でシンポジウムなども開いてきました。今の若

者は世代を越えて語り合ったり、“なぜ死ななかつたのか”といった本質的な議論ができない環境にある。今日は、そういう点で若い人たちが主体となってよい議論ができたと思います。成長していくイメージを持ちにくい今の子どもたちにとって、元気な若者の登場が必要です。若者が自信をもって生きていく仕組みは、こうした小さいことの積み重ねが困難を切り開いていくのではないかと思います。

(参加者の感想)

- いろんな人の意見が聞けて、突っ込んだ質問がされ、自分の至らなさに気が付くことができよかつた。身近に感じられる話が多く、大変勉強になった。これからいろいろ勉強して、自分の生き方をしっかり考えていきたい。(19歳女性:千葉大学学生)
- 「若者の新しい働き方」とは、それはそのまま「文化」のあり方、接触の問題である。次の集会では「若者の新しい仕事と文化」となればよいと思う。(71歳男性:協同総研)
- 「協同」の地域社会を構築するには、単に親密圏をつくれればよいというのではなく、公共性をどのような形で市民に手渡してゆくのか、という非常に政治的な側面も重要なネックになっていると思う。
- 自分の考えていた”仕事”ということがいかにせまかつたかということに気づくことができたことが、とても大きかつた。今まで思ったり、考えたりして、言葉に表せなかつたことを、今回参加していた方々の中に同じように考えている人がいて、表現してくれて、自分の考えを深めることができ、とてもよかつた。(19歳女性:千葉大学教育学部)



- いろいろな年代の人の話を聞いたのが、視野を広げるのにとってもよかった。70歳の方や、自分とは違う境遇で働いている人の意見には、自分が考えていることとは違うことが多かった。NPOについても具体的な活動内容は知らなかったのが、こんな仕事もあるんだ、と気づかされた。(19歳女性:千葉大学教育学部)
- 最近ずっと将来の仕事について悩んだりしていたけれど、グループワークでいろいろな人と生で話し合いをしたお陰で、今までより柔軟な考え方・その重要さということに初めて気づかせてもらい、とても私にとって有意義なものになった。これに参加したことは、これから先にもきっと役立つと思った。(19歳女性:千葉大学教育学部)
- いろいろな人たちと話した。結構みんな心がほぐれた。あまり難しいことを言わなくなってくれたのがよい。自分たちの言葉で話をするようになってきたことがよかった。(29歳男性:インターンシップ中)
- 長時間にわたる分科会だったけど、フロアーからも積極的な意見が出たと思う。労協の働き方って、言葉にするとすごくシンプルにクリアーに伝わるんだと思った。(25歳女性:労働者協同組合)
- 自分の中での”働くということ”への価値観が変わった。ますます働くって何だろうと考え込んでしまった。でも大学3年生で、これからまだまだいろいろなことができるんだと思った。(20歳女性:千葉大学教育学部)
- 少人数でのディスカッションや4人の方の体験談などを通して、さまざまな仕事観があることに驚きました。今まで、まだ就職なんて先のことと考えると、仕事のこととは考えないように、今が楽しく過ぎればいいと思っていたけれども、長いこれからの人生、自分はどう行きたいのか、ということも含め、仕事について考えてみたいと思いました。はじめは授業のため仕方なく、という感じだったけれども、この集会に参加してよかったと思います。(19歳女性:千葉大学教育学部)
- まる1日の日程は大変かと思っただ、終わってみれば短かった。足りない。パネリストはともかく、会場参加者の意見が活発でうれしかった。(26歳男性:千葉大大学院)

